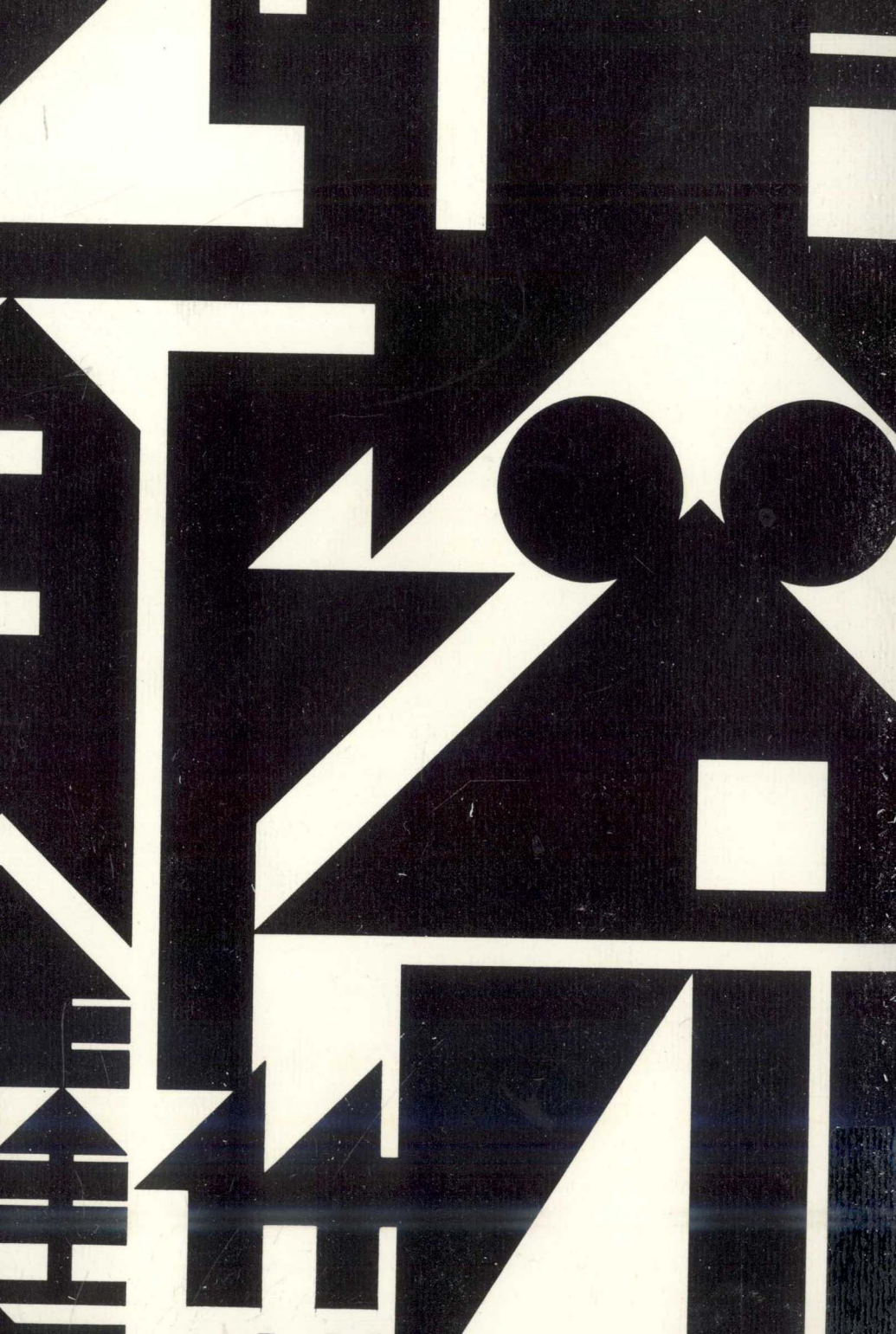




長谷川四郎全集第十四卷

一九七八年四月十五日発行

著者長谷川四郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一〇二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・一八四一(編集)

振替東京六一六二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七八年(検印廃止) 落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集 第十四卷 晶文社



長谷川四郎全集第十四巻・目次

1 ダンダン 海に落ちた話 9

2 ゴタムばなし 127
落下の記憶 144

3 長谷川四郎「少年」について 185
田中千禾夫『八百屋お七牢日記』 188
私の好きな花 189
私の略歴 190
万里の長城 191
……襲う寒波かな 193
知恵の悲しみ 194
父の残してくれた豆本 202

俳優座の舞台

204

理髪師マヌエル・コルテスの潜伏三十年

205

レマルク『リスボンの夜』

206

喜劇について

207

ぼくの予言

213

北田玲一郎

215

思い出の吉田一穂

217

チャールズ・セルトマン『古代の女たち』

219

二つの顔

222

私の翻訳論

223

言志妄録

234

『壁に隠れて』訳者あとがき

235

道外的外套の話

238

回想の中の無声映画

241

裏話の裏

251

島尾敏雄『東北と奄美の昔ばなし』

254

『知恵の悲しみ』おくがき

257

りこうな人たち

258

木六会のこと

260

江口幹『方位を求めて』 263

文庫にしてほしい本(アンケート) 265

パブロ・ネルーダ 266

パブロ・ネルーダの死を悼む 268

杉浦明平『田園組曲』 270

猫 271

ロルカの魅力 275

大江健三郎『洪水はわが魂に及び』 277

饗庭孝男『表現者の夢』 282

越後の笹飴 285

長璋吉『私の朝鮮語小辞典——ソウル遊学記』 290

何を恐れているのか 292

プーシキン 294

わが子の名前・元吉 297

『画家のことば』を読んで 297

人生一寸さきはヤミ 301

イワンの馬鹿 304

『黒木太郎の愛と冒険』推薦文 309

月曜短評 309

作者のノート・14
解題 福島紀幸

320

315

1

ダン
ダン
ダン

海に
落ち
た話

この本のなかに書かれていること

海と山のあいだ、ほそ長い町で

まつりだ ワッシュイ

神かくし ダンダンがいなくなった

犬のころはわからない

引力のしわざ 落ちていく、落ちていく

はなうたまじりで

古典はおしえる——本ばかりが人生じゃない

地震のようなあらし 難破船からにげる

暴君と暴君のけんか 海の底には何がいる？

夜光虫光る海

人面の大岩

死人はくるしまない 死人の国で

魚やくにおい あばらやの親切

土地は地主のものじゃない ふしぎなぬしがいる

さびしい森

帰ったときと出ていったときとはちがう

都会へ ふたたび出発

*

町の本屋へ行くと、店員がいて

「やあ、ツン。元氣そうじゃないか。」

「おじさん、こんにちは。」

すると店員がわらいだして、いった。

「ハ、ハ、ハ。アヒルのひよこがよちよち歩き、コネコの子っこにいったそうだ、クワツ、クワツ、クワツ。おじさん、こんにちは。いい天気だね。」

この町の人ではなくて、まだはたちになるかならないで、ちかごろどこからかやってきた男で、旅の、また、アルバイトの学生のようにだった。

ツンは本だなから本をとりだして、ページをひらいて目にちかづけた。すこしばかり近視眼だった。それから、本をもどして、またべつの本をとりだし、ページをひらいて目にちかづけた。ミツバチがとんできて、じぶんのすきなミツをさがしているようだった。

そばで見ていた店員が

「マンガは、きらいかい？」

そして、ふしをつけて。

山のあなたの空とおく

タム タム タム タム

たいこのリズムでダンスする

怪獣住むと人のいう

「きらいじゃないけど、すきでもないわね。」

『人間の先祖』という本を、ツンはひらいていた。

「本読むの、すぎなんだな。だがよ、本ばかりが、人生じゃないぜ。」

「それ、なんのこと？」

「さっき、すばらしいニジが出ていたっけ。うたう大空の七人むすめだ。ツン、きいたかね？」

「なにいつてんのよ。きょうは、雨なんかふらなかったし、ニジが出るわけ、ないでしょ。」

「そうだったかな。」

店員がわらい、ツンもわらった。

「どれにしようかしら。」

またべつの本へ、ツンは手をのばした。

「トマト料理のいろいろ、というのは、いかがで？」

「トマトはいいわね。だいすぎ。」

「いまトマトの、出さかりだ。」

「でも、トマト料理なんて、あるのかしら。あたし、今まで、むしゃむしゃ、たべちゃうけど。」

「この世のなかにはな、ツン。料理できないものなんか、ないんだぜ。おれは、料理店にいけば、一流のコックなんだ。」

店員が、えばった。

「あら、そうなの。」

「なにに、いたします？」

「こんどは給仕人に、なりすましていた。」

「そうね、なんにしようかしら。」

本屋の店先から、道路をへだてて、海がひろがっていた。海には一そうの船がうかんでいて、材木をつみこんでいた。

よくはれた夏の天気。トラックがいつたりきたり。通行人のむれ。カラカラカラと、機械の音。あいまいに、エンヤコラ。はたらく人びとの、かけ声がした。

「マンガにしろよ、ツン。」

「怪獣の？」

「そうなんだ。かおはライオンで、ひたいにはサイのツノ。からだはイノシシで、手足としっぽはトカゲなんだ。でっかいぜ。」

「つまんないの、そんなの。」

「おれが、つくったんだ。」

「そうらしいわね。」

「タム、タム、タム、タム。」

むねをたいこにして、店員はたたいてみせた。

「おじさん。」

ツンがいった。こうとしか、呼びようがなかったから。

「はい。」

「こないだの本、おもしろかったわ。」

「なんだったっけ。」

「ロビンソン・クルーソー。」

「そうか。文庫本で四さつだったな。」

「うん。」

「もう読んじまったのか。」

「そう。」

「するてえと、こんどは、ガリバー旅行記だな。」

「ガリバー？」

「ロビンソン・クルーソーは、海で難破したはなしたが、ガリバー旅行記も、海で難破したはなした。難破して、それから、それから……。」

「それから、あとはひみつ。読んでごらん。そうでしょう？」

「そう、そう。」

「でも、こわいわね、台風の海。防波堤にぶつかって、ドッカーン、ドッカーン。」

「——精神自由の人間は、永遠に海を愛す。」

片手をさしのべて、詩人きどりで、店員がいった。

「そうね、その、ガリバーにしようかしら。」

すぐさま、店員は、なんだか手品師のような手つきで、一さつの本をとりだしてきた。さし絵がいっぱい。色とりどり。大きな本だった。

ツンは、ためらった。エプロンのポケットに、はいっているお金が、たりなかったから。『人間の先祖』ならば、おつりがきたが、やっぱり、ガリバーのほうに、ひかれたので、もっとお金をためてから、このつぎに来て、ガリバーを買おうかと、考えた。

店員は、それをみてとった。

つばにいた切り花ならば

枯れたらすてましょ

本は読んだらとつときましょ

また読むこともあるからな

口のなかで、ぶつぶつ、こうつぶやいて、それから

「トマト料理のいろいろ、にしなよ。」

「そうね、それ、おいくら。」

「二百円。」

エプロンのポケットには、かっきり二百円、はいっていた。

「それ、ちょうだい。」

「へい、まいどありがとう。」

本をつつみはじめた。つつんでいるあいだに、ツンが

「でも、トマトは、いま、たかいわ。」

「ちきしょう。出さかりのくせに、たかいとくる。あんまり、た

かかったら、かっぱらって、くるんだな。」

と、本をわたしながら、店員。

「読むだけでも、いいわよ。」

「ばかな。ダンダンに、たのめ。やつは投げなわの名手だろ。やおやの店から、かんたんなんんだ、トマトひとかご、しょっぱいてくるさ。」

「そうね。ガリバーも、ダンダンに、たのもうかしら。あ、もう時間だわ。ごはんのしたく、しなくっちゃあ。」

わらってツンは、本をこわきに、こぼしりに、かえっていった。
「おれにも、トマト料理、食わしてくれよ。」
わらって店員が、うしろから、呼びかけた。

1

月がでたでた月がでた ヨイヨイ

三池炭坑のうえにでた

あんまり煙突がたかいので

さぞやお月さん けむたかろ

サノヨイヨイ

とつくに三池炭坑は閉山になったが、この炭坑町からうまれた、
このおもしろいうたは、生きていて、ぜんこく津津浦浦にひろま
って、みんなからしたしまれ、うたわれているのであって、あの
ときも、あの海にめんした、小さな町で、そう、人口九千くらい
も、あつたらうか、あの町で、人びとがあつまって、うたってい
た。

ドンドコ、ドンドコ。

そして小学生たちは、おんなじふしまわしで、うたっていた。

海は広いな大きいな ヨイヨイ

月がのぼるし日がしずむ

海は大なみ青いなみ

いつてみたいな よそのくに

サノヨイヨイ

ドンドコ、ドンドコ。たいこの音。

町はお祭りの、さいちゅうだった。

その年は、もう何十年もむかしから、ばったり、とれなくなっていたニンシが、どういう風のふきまわしか、それとも、どういう潮のながれまわしか、いきなり、どっさりとなれて、浜べはニンシの大群で足のふみばもないくらいだった。

また、夜のうちに、でっかいクジラが砂浜にあがってきて、朝早く、人びとがおきて出てみると、そこにごろりと、クジラがよこたわっていることが、一度ばかりか、三度もあった。

まえば海。うしろは山。

この山から切りだされる材木が、とおくの大きな都会の、地下鉄工事の現場から、トンネルのわく組用として、注文がきて、切りだすそばから、すぐ売れた。

沖には、この材木をつみこみにきた貨物船が、なんそうもうかんでいた。

その年の、この町は、けいきがよくて、年に一度の、こんびら神社のお祭りも、とくべつ、にぎやかだった。

「わしや、かんけいない。わしの小屋は、村はずれに、あるで

の。」

という、ふるいロシヤのことわざが、あったそうだが、その町のずっと町はずれにも、いっけんの小屋が立っていて。

その小屋は

「けいきがよいなんて、わしや知らん。」

と、いつているようだった。

もう夜だった。

日に七回、となりの町との往復バスが、いったりきたりする道路であって、ちょうど日照りつづきの八月。バスがとおるたびに、もうもうと土ほこり、まいあがり、小屋のまどガラスがくもりガラスのようになっていて、このまどの外から、とおるすがりに、ふとのぞいてみると、小屋のなかで、ひとりのおやじが、酒をいっばい、のんでいるようなけしきだった。

帯のはば、ほどある町で

とんと豆腐売り ナーヤーエ

やしゃで やのしゃで

やのしゃで やのしゃで

橋からおちたな

あげてくだんせ あぶらあげ

小屋のおやじは、やめぐらしで、いちんちじゅう、山の伐採地でおもたい材木がついで、運んだもんで、肩がひしゃげて、ど